

菊地歌子先生と過ごした楽しい時間

外国語学部教授
菊地 敦子

菊地歌子先生と私は同じ年に関西大学に入った。二人とも「菊地」という苗字。しかも「菊地」の「地」は同じ「地面」の「地」。学生の中には私と歌子先生が姉妹だと思っている人もいる。同期なのでよく一緒に過ごした。関大に入ったばかりの頃歌子先生は頻繁にホームパーティーを開いていた。そこで私は仏文科の先生、大阪の日仏協会の方などにお会いする機会をいただいた。歌子先生はフランス語の通訳をするので、通訳仲間も多い。東京でフランス語を教えていた頃の教え子との交流も保っているし、通訳の仕事を通して知り合った人とも友だちになったりする。歌子先生を通して色々な人と知り合いになることができた。そんな風に歌子先生の周りに色々な人が集まってくるのは歌子先生がだれにでも親切で気前がいいからである。歌子先生のうちのパーティーでは、歌子先生が料理したアルザス風の食事が出て、おいしいフランス・ワインが止めどなく出てくる。フランスからお友達がくれば宿泊を提供し、車で案内してあげる。歌子先生は本当に人がいい。私の友達が海外から来ても自分がいない時ならいつでも使ってとマンションを提供してくれる。

歌子先生とは何度かフランスでも落ち合って一緒に旅行した。パリ 19 区のアpartマンに歌子先生と一緒に滞在し、そこのバルコニーで二人でカフェオレとクロワッサンの朝食を食べたのを覚えている。お天気がいい夏の日でバルコニーからパリ北東部を流れるサンマルク運河を二人で眺めた。またある時は駅で待ち合わせ、一緒にトゥールへ行ったことがある。そこにあった甲南大学の付属高校、フランス甲南学園トゥレーヌで日仏英のリレー通訳のデモンストレーションをしたことがある。フランス人が話したフランス語を歌子先生が日本語にし、その日本語を私が英語にして英語話者に伝え、また逆方向でフランス語にするというものだった。学生から盛大な拍手をもらったのがとても嬉しかった。

リオンで待ち合わせたこともあった。それも夏だった。世界的に有名なフレンチ・シェフ、ポール・ボキューズのレストランに案内してもらった。ミシュラン 3 つ星レストランのカジュアル版でお料理は美味しく値段もリーズナブルだった。外のテーブルに座って美しく咲く公園の花を眺めながら楽しい食事をしたのを覚えている。

とにかく歌子先生といるとおいしい食事とワインが付き物だ。こうして書くと歌子先生といつも遊んでばかりいるように見えるかもしれないので歌子先生の真面目な面についても記して

おきたい。

一番感心するのは歌子先生の通訳の仕事の準備である。フランス語の通訳者としては皇室の通訳を頼まれるほどトップクラスである。卓越したフランス語の語彙力と電話ではフランス人と区別がつかないという素晴らしい発音ができるからその地位に達したと言えるかもしれないが、それだけではいい通訳者になれない。歌子先生は通訳の仕事を頼まれるとそのための準備を入念に行う。関連語彙を勉強したり、背景知識を得るために本を読んだりする。映画関係の通訳の場合は監督が作成した映画を何本も見る。カンヌ映画祭で女優賞をとったイザベル・ユペールの通訳をしたこともあるそうだ。

歌子先生自身がそれだけ努力してフランス語の達人になったので、学生にも同じ努力を求める。先生としてはなかなか厳しい。フランス語の面白さ、フランス文化を知る楽しさを学生がわかってくれないのが歯がゆいようだ。それでも授業に使えるかもしれないと雑誌の切り抜きやら、フランス語の本やらをいつも集めている。私もフランス語を勉強しているので、時々歌子先生に文法のことを聞くととても丁寧に説明してくれる。歌子先生自身はフランス語の音の美しさに魅せられて20歳ごろにフランス語を勉強し始めた。勉強を始めて4年目に朝日新聞主催のスピーチ・コンテストで優勝し、その賞品として得たフランス留学でフランスへ渡った。そのままフランスに四年間残り学士号を取得。後にまたフランスへ渡り、修士号、博士号を取得した。スピーチ・コンテストのために発音を猛烈に練習したのだと思う。それからフランス語の音声学に興味を持ち、その分野で教科書も出している。

4月から歌子先生がいなくなるのは寂しいが、嬉しいことに歌子先生はこれからも通訳の仕事が続けるそうだ。通訳の仕事を通してまだまだ新しい知識を身につけるに違いない。そんな新しい情報をこれからもぜひ聞かせてもらいたい。